特別寄稿

校歌誕生百年

～〈我等に燃ゆる希望あり〉～

飯澤 文夫
明治大学史資料センター研究調査員

校歌「白雲なびく」は、1920（大正9）年に制定され、歌い継がれて百年の歴史を刻んできました。

その成立には、学生自らが発議して奔走した、特異な経緯を持っています。

本学は1881（明治14）年に現在の千代田区有楽町で、明治法律学校としてわずか44人の生徒で呱々の声を上げましたが、江湖の評価は高く、間もなく駿河台南甲賀町（現在の日本大学病院敷地北東辺）に移り、1911（明治44）年には現在の神田駿河台1丁目1番地〈白雲なびく駿河台〉に新校舎を建築します。その頃には在学生は6千人に膨らんでいました。

ところが急激な規模拡大は、財政、施設・教育環境の悪化を招き、学生たちは憤懣を募らせ、大正デモクラシーの風潮も相まって大学改革への意識を高めていきます。一方で、学生たちは隅田川で行われる大学対抗のボート競技にも熱狂していました。しかし本学の成績は振るわず、学生たちは、選手の責任ではない、校歌もない大学の無気力が原因だと憤ります。

そして1920年春の予科学生大会で、秋に予定されている明大などが参加する第1回漕艇協会レガッタに間に合わせるよう校歌制定を決議し、後に本学総長・学長となる商科の武田孟など3人を実行委員に選出します。武田はクラスメートの牛尾哲造と越智七五三吉に協力を求めます。3人は予科長で文人の笹川臨風に相談し、熱血詩人として知られた児玉花外らを推薦され、校長の了解を取り付けて、飛び込みで作詞の直談判に行きます。幸いにも花外は喜んで承諾してくれました。

牛尾は本学ハーモニカソサエティーの創設に関わるなど、音楽に造詣が深かったことから、新進気鋭の作曲家山田耕筰に白羽の矢を立て、花外の原稿を携えて訪ねます。耕筰はワーグナー作曲のオペラ『タンホイザー』の我が国初演を控えていたことや、校歌作曲の経験がないこともあり渋ります

明治大学校歌

児玉花外 作詞
山田耕筰 作曲

一
白雲なびく駿河台
眉秀でたる若人が
撞くや時代の暁の鐘
文化の潮みちびきて
遂げし維新の栄になふ
明治その名ぞ吾等が母校
明治その名ぞ吾等が母校

二
権利自由の揺籃の
歴史は古く今もなほ
強き光に輝けり
独立自治の旗翻し
高き理想の道を行く
我等が健児の意気をば知るや
我等が健児の意気をば知るや

三
霊峰不二を仰ぎつつ
刻苦研鑽他念なき
我等に燃ゆる希望あり
いでや東亜の一角に
時代の夢を破るべく
正義の鐘を打ちて鳴らさむ
正義の鐘を打ちて鳴らさむ

1925［大正14］年の隅田川ボートレースの応援風景

応援のため隅田川のボート競技会場に向かう学生たち

牛尾哲造

児玉花外と武田孟（武田洋平氏提供）

明治大学ハーモニカソサエティー第1回発表会での校歌披露（1920［大正9］年10月28日、神田美土代町YMCAホール）。ステージ奥の壁に「番外 明治大学校歌」のめくり札が見える

が、牛尾の熱意は耕筰を動かします。

後に耕筰は校歌は牛尾の燃えるような意気の所産だと語っています。なお、〈文化の潮〉の「潮」も「牛尾」の熱情にほだされた花外が織り込んだものです。

耕筰は、花外の詩は調子が悪く曲をつけにくいからと、花外に断った上で、詩人の西條八十（やそ）に補作を依頼する紹介状を書き、3人の学生に向かわせます。八十は、拙（つたな）くても包蔵される力と熱が尊いのだと諭しますが、最後には窮状を察してくれました。

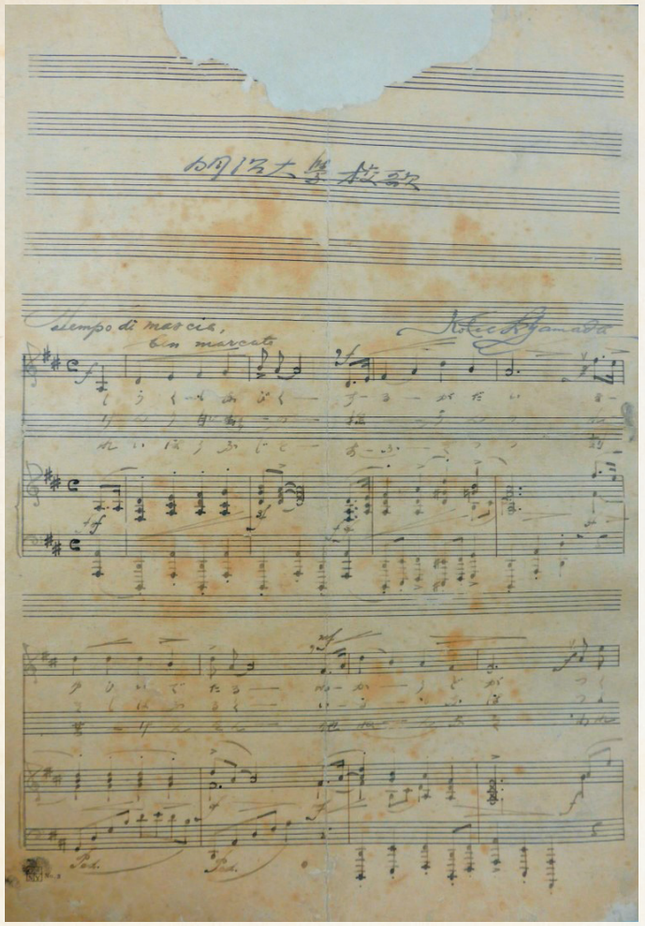
NHK連続テレビ小説『エール』で、慶應義塾大学に野球で連敗を喫したことに業を煮やした早稲田大学応援団が、古関裕而（ゆうじ）の自宅に押し掛けて応援歌『紺碧の空』の作曲を嘆願する場面がありました。3人の熱気もきっとあのようであったに違いありません。

こうして、作曲家の團伊玖磨（だんいくま）が、〝音楽として文学として諸校歌の中で白眉（はくび）〟と感嘆したほどの校歌が完成します。耕筰は牛尾の求めで歌唱指導に来校し、応援に使ってほしいと、クラシック音楽用の大太鼓まで寄付してくれました。

レガッタは残念ながら敗退しますが、校歌は隅田川土手に高らかに響き渡りました。

越智は当時を振り返り、「時代的苦悩と渋滞と低徊から脱却して一大革新戦線に邁進せんとする学生の、明治大学再建運動の精神的原動であった」と回想しています。

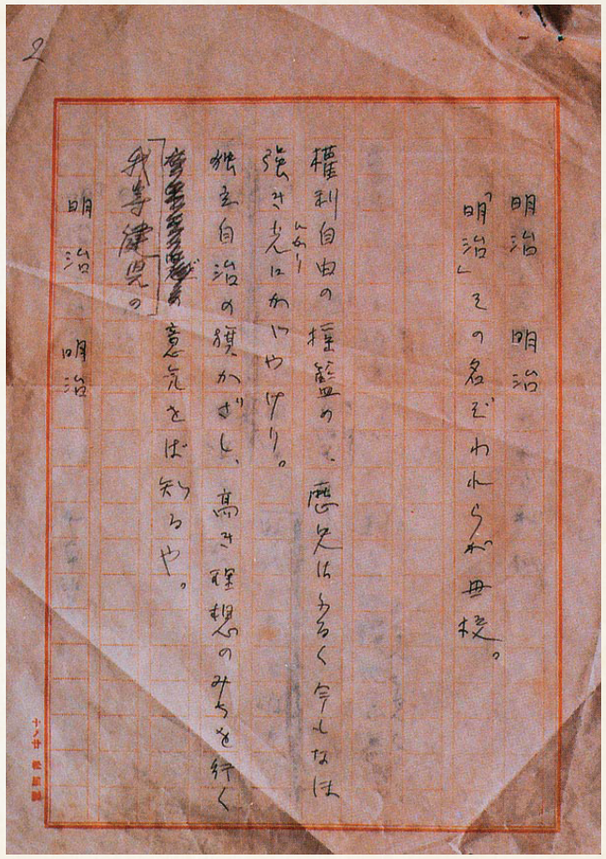
1930［昭和5］年9月30日、記念館講堂で、畑耕一作詞、山田耕筰作曲「明治大学応援歌」の歌唱指導をする山田耕筰



山田耕筰原譜（明治大学図書館所蔵）

近年、学生たちの手でアイデンティティを伝えていく「おお 明治～僕らの校歌プロジェクト」が立ち上がりました。百年の時を経て、熱い思いがつながります。

（明治大学史資料センター村松玄太氏の協力をいただきました）



西條八十補作原稿

1996［平成8］年に児玉花外の原稿として都内の古書店で売りに出され、文学館建設を進める東北地方のS市と商談が進んでいた。後藤総一郎図書館長（当時）とS市を訪ね、折衝を重ねた結果、幸いにも本学に譲られた（明治大学図書館所蔵）

西條八十（故西條八束（やつか）氏提供）

飯澤 文夫（いいざわ・ふみお）

明治大学史資料センター研究調査員

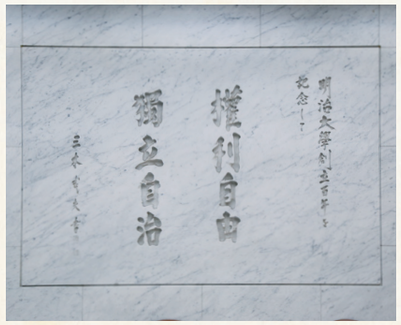
1949年長野県生まれ。1972年学校法人明治大学奉職。2001年文学部兼任講師、2007年から図書館事務部長、学術社会連携部長、研究推進部長を歴任し、2010年退職（同年より現職）。

「おお 明治～僕らの校歌プロジェクト」サイト

https://meisupo.net/special/list/31

（明大スポーツ新聞部ホームページ）

明大スポーツ新聞部などを中心とする学生が、校歌誕生100年の節目である2020年に、校歌が初めて公の場で歌われた10月28日を「校歌誕生100年記念日」として、明大生に対して校歌を広めムーヴメントをつくる活動をしています！



駿河台キャンパス・大学会館1階ロビーの三木武夫元内閣総理大臣揮毫（きごう）の「権利自由・独立自治」。「権利自由」は花外の原詞、「独立自治」は八十が補作で加えた。両句が相まって歌われることで本学の建学の精神として浸透した